

将来に向けた明確な目標を持っている学生の特徴

—平成27年度栄養学科1年生を対象として—

CHARACTERISTICS OF STUDENTS WITH CLEAR FUTURE GOALS

: A STUDY OF FIRST-YEAR NUTRITIONAL SCIENCE STUDENTS IN FY2015

高泉 佳苗 平澤 和樹 菅原沙恵子 後藤 未希 佐藤 玲子

Kanae TAKAIZUMI, Kazuki HIRASAWA, Saeko SUGAWARA, Miki GOTO, Reiko SATO

キーワード：栄養士養成校、短期大学1年生、目標、学習時間、食生活リテラシー

Key words: Nutritionist vocational school, Junior college first-year students, Goals, Study time, Healthy eating literacy

要 旨

目 的：将来に向けた明確な目標の有無に関連する要因を検討することを目的とした。

方 法：2015年6月に栄養学科1年生79名を対象にアンケート調査を実施した。回答者のうち、平成25年度以前に高等学校を卒業した12名を除外し、67名を解析対象とした。調査項目は、属性、将来に向けた明確な目標の有無、栄養士を目指した時期、朝食欠食、食生活リテラシー、不安な科目数、学習時間、短大での勉学の自信を調査した。

結 果：将来に向けた明確な目標の有無と栄養士を目指した時期 ($p=0.036$)、食生活リテラシー ($p=0.037$) との間に有意な関連が認められた。また、将来に向けた明確な目標を持っている者は、学習時間が長い傾向にあった。

まとめ：明確な目標を持つことは、食生活のスキルや勉学への取り組み姿勢に影響していると考えられるため、入学早期から明確な目標形成を促す対策が必要である。

Abstract

Objective: To examine factors related to the presence or absence of clear future goals.

Methods: A survey was conducted among 79 first-year nutritional science students in June 2015. A total of 12 respondents who graduated from senior high school in or prior to FY2013 were excluded, and the following items were analyzed in the remaining 67 respondents: attributes,

presence or absence of clear future goals, planned time to become a nutritionist, skipping breakfast, healthy eating literacy, number of subjects they find difficult, study time, and confidence in junior college studies.

Results: We noted a significant correlation between planned time to become a nutritionist and presence or absence of clear future goals ($p=0.036$), and healthy eating literacy ($p=0.037$). In addition, those who have clear future goals tended to have a long study time.

Conclusion: The results suggest that the presence of clear goals affects ability to manage dietary habits and a student's approach to his/her studies. Hence, there is a need for measures to encourage the setting of clear goals by students at an early stage upon enrolment.

I. 諸言

本学栄養学科は栄養士を養成する学科として開設され、本年度から一期生の養成教育が始まった。栄養士とは栄養の指導に従事する者であり、その活躍の場所は、保健所、病院、学校、事業所、保育所、高齢者施設、スポーツ施設、食品会社など多岐にわたる。そのため、資格取得に向けた教育内容は、栄養学、食品学、調理学、解剖生理学、生化学などの専門的知識の修得のみならず、実験および実習による専門技術の修得も求められる。栄養士養成校に入学した新入生は、入学直後からこれらの専門教科の授業に取り組み、栄養士としての専門性を高めていかなければならない。

近年の大学生の特徴として、特別な目的もなくみんなが行くからということで入学してくる学生や、勉強をしたいわけではないが就職に有利という理由で入学してくる学生がいることが指摘されている¹⁾。また、授業を受ける学生の問題点の一つとして、行動に結びつく目標が持てず、授業や演習への参加意識が低いことがあげられている²⁾。本学科では、6月に株式会社ナガセに依頼をして、1年生を対象に「学習状況・生活状況アンケート調査」を実施した。その結果、明確な将来像を持っていない学生は62%であった。将来像が持ていないということは、本学卒業後何がしたいのか、どんな場所で働きたいのか、どんな栄養士になりたいのかといった具体的な目標が持てていない可能性がある。

目標を持つことは学業遂行に影響しており、目標（マスタリー目標）を持つことは成績に好影響を示すことが報告されている³⁾。本学科に入学してくる学生は、栄養士の資格取得を目指して入学してくるが、そのような学生にとって将来に向けた明確な目標を持つということが学習の取り組みや生活状況にどのように影響しているのかは不明である。そこで、本研究は栄養学科1年生を対象に、将来に向けた明確な目標の有無に関連する要因を検討し、本学科における学生指導や教育対策のための資料を得ることを目的とした。

II. 方法

1. データ収集と対象者

2015年度栄養学科1年生を対象にアンケート調査を実施した。アンケートは「給食管理実務論」の第10回目の授業で行い、授業に出席した79名にアンケートを依頼し、79名から回答を得た（回収率100%）。回答者のうち、平成25年度以前に高等学校を卒業した12名を除外し、平成26年度に高等学校を卒業した67名を解析対象とした。

アンケートは無記名で行い、実施にあたっては、研究者から対象者に対して、研究の目的、アンケートは任意であり回答しないことによる不利益は一切生じないこと、アンケート結果は本研究以外には使用せず、回答者を特定することはしないことを口頭およびアンケートの表紙に明記し、研究の趣旨を理解し、アンケートの協力に同意できれば回答するよう依頼した。アンケートには表紙を付

け、回答の有無が第三者にわからないように配慮した。

2. 調査項目

1) 属性

対象者の属性を把握するために、性別、年齢、高等学校卒業年度、出身地（宮城県内・宮城県外）、住まい（一人暮らし・自宅暮らし）、アルバイトの有無、入試区分、本学科は第何志望だったかを調査した。

2) 将来に向けた明確な目標の有無

質問は、「現在、あなたは将来に向けた明確な目標を持っていますか」とし、回答は“持っている”、“どちらともいえない”、“持っていない”とした。解析の際は、“持っている”を“目標あり”とし、“どちらともいえない”と“持っていない”を統合し、“目標なし”とした。

3) 栄養士を目指した時期

栄養士を目指した時期について調査するために、「栄養士を養成する学校に進学したいと思いはじめたのはいつの時期でしたか。」と質問し、回答は、“高校2年以前”、“高校3年”とした。

4) 食生活および食スキル

食生活として、朝食の状況を調査した。質問は、「朝食は週に何日食べていますか？」とし、回答は、“毎日食べている（週7日）”、“週5、6日食べている”、“週3、4日食べている”、“週1、2日食べている”、“食べない”とした。解析の際は、“毎日食べている（週7日）”を“欠食なし”とし、それ以外を“欠食あり”とした。

食スキルは、食生活リテラシー尺度⁴⁾を調査した。食生活リテラシー尺度は、「新聞、本、テレビ、インターネットなど、いろいろな情報源から食情報を集められる」、「たくさんある情報の中から、自分の求める食情報を選び出せる」、「食情報がどの程度信頼できるかを判断できる」、「食情報を理解し、人に伝えることができる」、「食情報をもとに健康改善のための計画や行動を決めることができる」の5つ項目があり、回答は各項目に対

して、“全くそう思わない”～“強くそう思う”の5段階で回答させる尺度である。尺度得点は、全項目の平均得点とした。

5) 不安な科目数

現在の授業において勉強を進める上で不安に思っている科目数を調査した。質問は、「現在、授業の学びに不安な科目はありますか」とし、前期必須科目である16科目の中からあてはまる科目を回答させた。

6) 学習時間

質問は、「現在の1日あたりの学習時間を教えてください（授業時間は除く）。」とし、“0時間（=0点）”、“1時間未満（=1点）”、“1時間以上～3時間未満（=2点）”、“3時間以上～5時間未満（=3点）”、“5時間以上（4点）”からあてはまる時間を回答させた。

7) 短大での勉学の自信

質問は、「短大での勉学について、現在の自信を教えてください。」とし、回答は“自信がある”、“やや自信がある”、“やや不安である”、“大変不安である”、“特に思いはない”とした。解析の際は、“自信がある”と“やや自信がある”を統合して“自信がある”とし、“やや不安である”、“大変不安である”、“特に思いはない”を統合して、“自信がない”とした。

3. 解析

解析は解析ソフト IBM SPSS Statistics 23を使用し、対応のない比率の差は χ^2 検定または Fisher の直接法を、対応のない独立した変数のデータの差は Mann-Whitney の U 検定を用いて検討した。統計的有意水準は5%未満とした。

III. 結果

1. 対象者の属性（表1）

性別は、男性7名（10.4%）、女性60名（89.6%）であり、平均年齢（標準偏差）は18.2（0.4）歳であった。また、出身地は宮城県内が38名（56.7%）であり、一人暮らしをしている者は24名（35.8%）であった。アルバイトをしている

表1 対象者の属性

	n = 67	
	n	(%)
性別		
男性	7	(10.4)
女性	60	(89.6)
出身地		
宮城県内	38	(56.7)
宮城県外	29	(43.3)
住まい ¹⁾		
一人暮らし	24	(35.8)
自宅暮らし	42	(62.7)
アルバイト ²⁾		
していない	31	(47.7)
している	34	(52.3)
入試区分		
公募推薦	16	(23.9)
指定校推薦	36	(53.7)
AO入試	6	(9.0)
一般入試	9	(13.4)
本学科は第何志望か		
第1志望	42	(62.7)
第2志望	20	(29.9)
第3志望	2	(3.0)
その他	3	(4.5)

¹⁾ 欠損値1名

²⁾ 欠損値2名

表2 将来に向けた明確な目標の有無と対象属性との関連

	将来に向けた明確な目標の有無				p値 ³⁾
	目標あり		目標なし		
	n	(%)	n	(%)	
性別					
男性	3	(11.1)	4	(10.0)	0.594
女性	24	(88.9)	36	(90.0)	
出身地					
宮城県内	13	(48.1)	25	(62.5)	0.245
宮城県外	14	(51.9)	15	(37.5)	
住まい ¹⁾					
一人暮らし	13	(48.1)	11	(28.2)	0.098
自宅暮らし	14	(51.9)	28	(71.8)	
アルバイト ²⁾					
していない	14	(51.9)	17	(44.7)	0.571
している	13	(48.1)	21	(55.3)	
入試区分					
公募推薦	6	(22.2)	10	(25.0)	0.783
指定校推薦	14	(51.9)	20	(55.0)	
AO入試	2	(7.4)	4	(10.0)	
一般入試	5	(18.5)	4	(10.0)	
本学科は第何志望か					
第1志望	15	(55.6)	27	(67.5)	0.331
第2志望	11	(40.7)	9	(22.5)	
第3志望	0	(0.0)	2	(5.0)	
その他	1	(3.7)	2	(5.0)	

¹⁾ 欠損値1名 (目標あり27名、目標なし39名)

²⁾ 欠損値2名 (目標あり27名、目標なし38名)

³⁾ χ^2 検定

者は34名 (52.3%)であった。受験において、本学科が第1志望であった者が42名 (62.7%)、第2志望だった者が20名 (29.9%)であった。

2. 将来に向けた明確な目標の有無と対象属性との関連 (表2)

将来に向けた明確な目標を持っている者 (目標あり) は27名 (40.3%)、持っていない者 (目標なし) は40名 (59.7%)であった。目標の有無と属性に有意な関連は認められなかった。

3. 将来に向けた明確な目標の有無に関連する要因と特徴 (図1~6)

将来に向けた明確な目標の有無と栄養士を目指した時期に有意な関連が認められ ($p=0.036$)、「目標あり」の中に高校2年生以前から栄養士を

目指していた者が多かった (図1)。さらに、将来に向けた明確な目標の有無と食生活リテラシー尺度との間に有意な関連が認められ、将来に向けた明確な目標を持っている者は、食生活リテラシー尺度が高かった ($p=0.037$: 図6)。統計的有意差は認められなかったが、将来に向けた明確な目標を持っている者は、学習時間が長い傾向にあることが確認された (図5)。

一方、将来に向けた明確な目標の有無に関わらず、短大での勉学に自信がない者が8割以上おり (目標あり84.6%、目標なし97.5%: 図2)、不安な科目数は平均5科目 (目標あり5.2科目、目標なし4.9科目: 図4)であった。

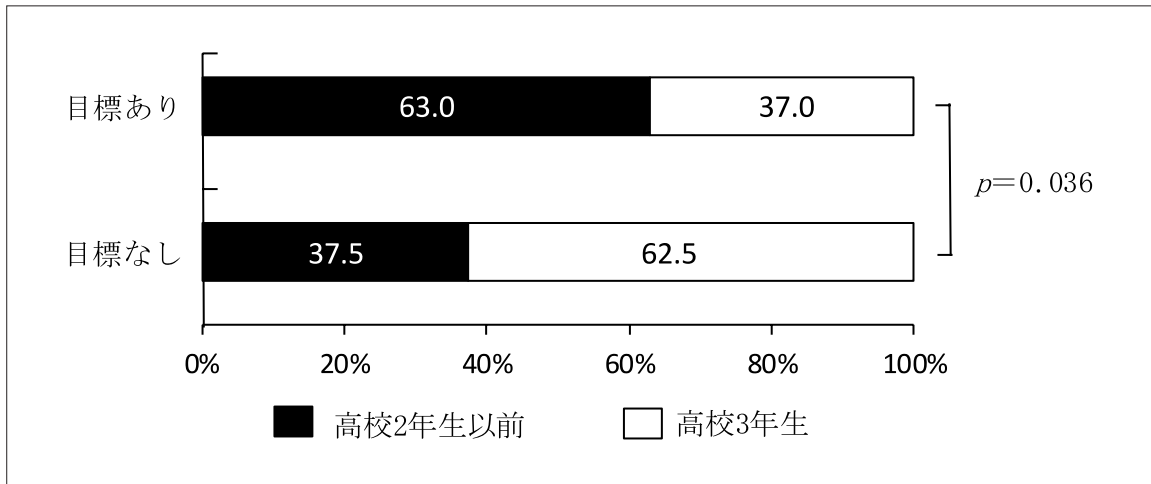


図1 将来に向けた明確な目標の有無と栄養士を目指した時期との関連 (Fisher の直接法)

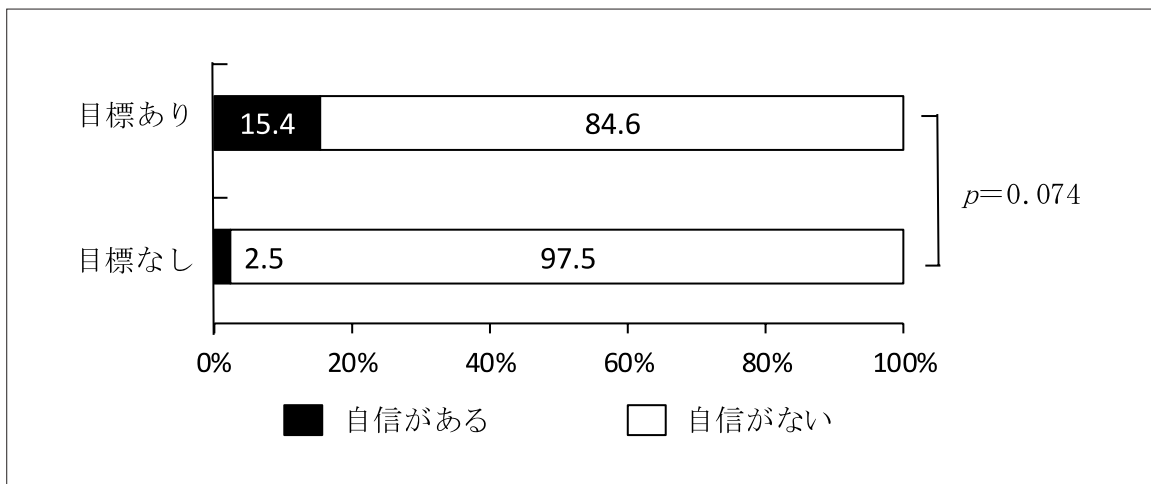


図2 将来に向けた明確な目標の有無と勉強への自信との関連 (Fisher の直接法)
(欠損値1名のため目標あり26名で解析)

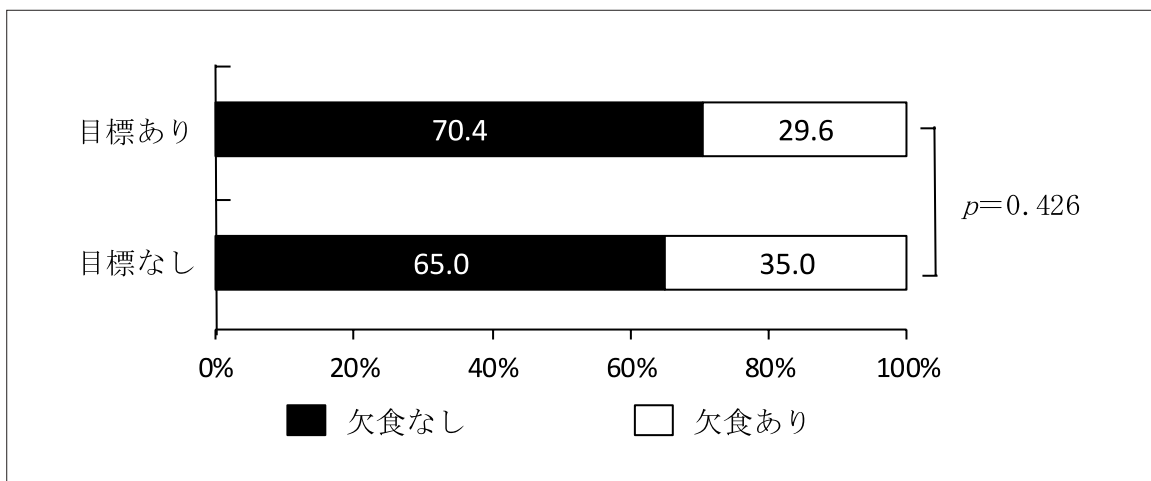


図3 将来に向けた明確な目標の有無と朝食欠食との関連 (Fisher の直接法)

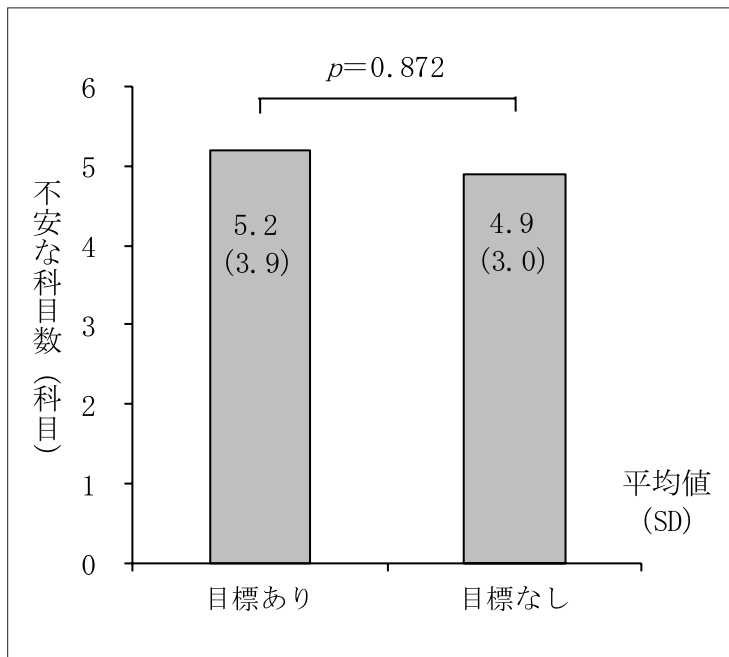


図4 将来に向けた明確な目標の有無と不安な科目数との関連 (Mann-Whitney のU検定)

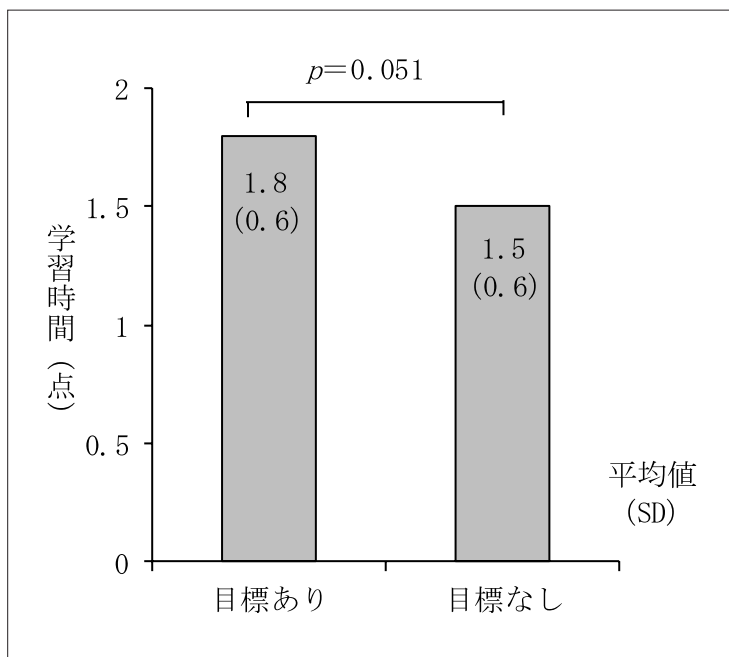


図5 将来に向けた明確な目標の有無と学習時間との関連 (Mann-Whitney のU検定)
(欠損値3名のための目標あり25名、目標なし39名で解析)

IV. 考察

1. 求める学生像

本学科のアドミッションポリシー (AP) として、「栄養と健康の関わりに関心を持ち、心身の健康を大切にできる学生」が掲げられている。本研究では、将来に向けた明確な目標を持っている者は、そうでない者よりも食生活リテラシーが高く、食スキルが高いことが示された。食スキルが高いということは、健全な食生活を実践していると考えられ、APに掲げている“栄養と健康への関心”が高く、“健康管理”ができていく可能性が示唆される。栄養士を目指した時期が高校2年生以前の者に将来に向けた明確な目標を持っている者が多いため、栄養士という目標を早期に持つことは、食スキルの向上につながっている可能性がある。

2. 教育対策

本研究により、明確な目標を持っている者は、そうでない者よりも学習時間が長い傾向にあることが確認された。目標を持つことは、勉学に取り組む目的ができるため、それが学習時間の確保につながっていると推察される。よって、学生が明確な目標を持つことは勉学への取り組み姿勢に影響している可能性があるため、本学科学生が入学早期から明確な目標を設定できるような対策が必要であるといえる。

一方、将来に向けた明確な目標の有無に関わらず、短大での勉学に自信がない者が8割以上いることが明らかとなった。また、授業の学びに不安がある科目数においても、明確な目標の有無に関わらず平均5科目程度の不安な科目を有していることがわかった。以上のことから、本学科1年生の多くは、短大での学びに対して何らかの不安を抱えている現状が明らかとなった。栄養士

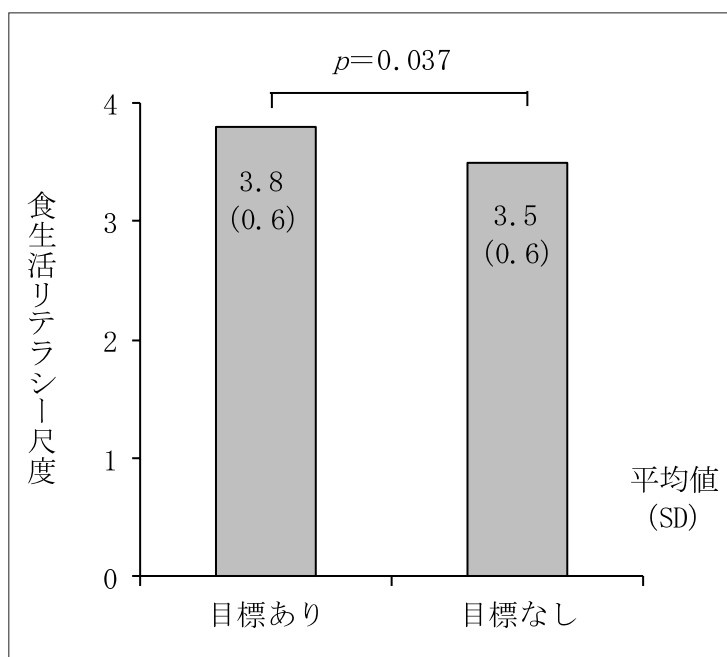


図6 将来に向けた明確な目標の有無と食スキル
(食生活リテラシー尺度)との関連
(Mann-Whitney のU検定)

養成課程のカリキュラムは、1年生前期に授業数が多いという特徴があり、さらに、初めての定期試験をひかえているという状況が、勉学に対する自信の低下や不安の要因になっていた可能性ある。1年生が短期大学という新しい学びの環境の中で、前向きに勉学に取り組んでいけるような働きかけを入学時から行っていくことが求められる。

3. 本研究の限界と課題

本研究の限界として、対象集団が本学科開設の第一期生という限定された集団であることがあげられ、得られた結果が来年度以降の入学生にあてはまるかは不明である。そのため、来年度以降も調査を継続し、本学科入学生の特徴を経時的に把握しながら、その特徴を教育に還元していくことが必要である。

本研究によって、学生が明確な目標を形成できるような対策の必要性が示された。今後は、目標形成に向けた授業対策を展開し、その教育効果を卒業時に検証することが課題である。

V. 結論

本年度栄養学科1年生において、将来に向けた

明確な目標を持っている者の特徴は、高校2年生以前から栄養士を目指しており、食スキルが高かった。また、学習時間が長い傾向にあった。明確な目標を持つことは、食生活のスキルや勉学への取り組み姿勢に影響している可能性が考えられるため、入学早期から明確な目標形成を促す対策が必要である。

引用文献

- 1) 瀧上凱令 (1998). 高等教育における学生・教師の意識変化, 高等教育ジャーナル, 3: 114-120.
- 2) 阿部和厚, 小笠原正明, 西森敏之・他 (1998). 大学における学生参加型授業の開発, 高等教育ジャーナル, 4: 45-65.
- 3) 田中あゆみ, 藤田哲也 (2003). 大学生の達成目標と授業評価、学業遂行の関連, 日本教育工学雑誌, 27(4): 397-403.
- 4) 高泉佳苗, 原田和弘, 柴田愛・他 (2012). 健康的な食生活リテラシー尺度の信頼性および妥当性: インターネット調査による検討, 日本健康教育学会誌, 20(1): 30-40.